巻頭言
＊

皮膚科医44年目の雑感

衛藤　光

若い頃から膠原病の患者を多く診てきた。 Visual Dermatology（Vol.15No.12, 2016）でも少し触れたが、新生児LEで診ていた子が結婚の挨拶に来てくれたり、幼少児期発症のSLEや皮膚筋炎の患者が無事に母となったり、入退院を繰り返していたSLE患者が元気に傘寿を迎えたり、主治医として嬉しいことが多々ある。しかしその反面、外泊から戻ったSLE患者がニューモシスチス肺炎と思われる間質性肺炎で亡くなったり、抗リン脂質抗体症候群が知られなかった時代にSLE患者に皮膚潰瘍が多発して脳梗塞で亡くなったり、内臓真菌症や大動脈瘤破裂で救命し得なかった患者の事など、忸怩たる思いをしたことも忘れられない。医師の判断は時に患者の生命を左右するため、何年経験しても責任の重さを痛感する。もちろん皮膚科で診る膠原病患者の多くは生命予後は良いが、皮膚病変は難治性のことが多く整容的な悩みは計り知れない。2015年、欧米に遅れること55年にして、本邦でもヒドロキシクロロキンがSLEと皮膚エリテマトーデスに使えるようになった。この薬剤の開発治験に関わる機会があったが、難治性皮膚病変に著効することもあり、ようやく本邦でも日の目を見たことは感慨深い。

大学時代から乾癬の専門外来にも関わっていたが、聖路加に赴任してからは多くの乾癬患者を診る機会に恵まれた。それまでは不覚にも乾癬は“軽い”病気と思っていたが、患者会の相談医となり、改めてこの病気の難しさを知らされた。医師の不用意な一言「死ぬ病気じゃないが一生治らない」に傷つき医師不信や引きこもりとなった患者がいかに多いことか。井上勝平先生によると患者とは心に串の刺さった者であるが、我々皮膚科医が患者の心に串を刺しては元も子もない。乾癬の診療では2010年代のバイオ登場の時代に居合わせられたことは幸いであった。当初申請から数年はかかるとみられたTNF製剤の早期認可を求め、患者会代表と東京通信の江藤隆史先生と共に3.3万筆の署名を持って厚労省に陳情に行ったことも懐かしい思い出である。その１年後にTNF製剤２剤が認可された。これらの薬剤の効果は劇的であり、患者の人生を変えるlife changing medicineであることを多くの患者から教えられた。

聖路加は教育病院でもあるので若い医師を育てることも重要なミッションであった。幸い優秀な若者がレジデントやスタッフとして大勢来てくれ、聖路加を離れてからもそれぞれ大学人、勤務医、開業医として（神皮のメンバーも数名）活躍中である。海外に留学した者も多く、２名は現在も聖路加のスタッフとして、１名は他大学の熱帯医学国際プロジェクトのメンバーとして活躍中であり、元レジデントの１人は現在米国に留学中で今年のAADのEverett C Fox, MD memorial awardを受賞したとの知らせが来た。このような活躍を聞くととても嬉しい。

人生夢の如し、気がつけば孔子の言う従心の70歳代を目前としている。聖路加を定年後４年近く続けた非常勤もこの３月で終了し、４月からは関連のクリニックと地方の老健のお手伝いをして糊口を凌ぐ生活となった。今までは京都二尊院の人生五訓「あせるな、おこるな、いばるな、くさるな、おこたるな」を日々の諌めとしてきたが、どれも簡単なようで難しく、とりわけ「おこたるな」は守れた例しがなかった。しかし、これからは岩合光昭氏の言の如く「幸せのあり方は猫に聞け」の心境で我が家に出入りするドラ猫を見習い、あるがままの心に従った自然体の生き方をしたいと思う。神皮の皆さまにはこれまで以上に一層のお付き合いをお願いしたい。